

「格闘する聖徒の群れ」

ハバクク書 1 : 1 - 4

September.12.2021

今朝は、この礼拝堂が恵みのうちに建てられ 35 年が経ったことを記念する献堂礼拝の日です。

聖書の御言葉を分かち合う前に、まず、この礼拝堂の献堂にちなんだこれまでの歩みを振り返る映像を見ていきたいと思います。

ハバクク書 1 : 1 - 4 (パワポ)

Preface

聖書の中には、預言書と呼ばれるものが 17 卷あります。

イザヤ書やエレミヤ書のような大預言書と、ヨナ書やマラキ書のような小預言書とに分けることが出来ますが、その 17 卷の預言書の中でも、唯一というような特徴を持っているのが、今お読みしましたハバクク書です。

ハバクク書以外のほとんどの預言書は、神様の語り掛けから始まり、その後、その神様の語り掛けに対する預言者たちの反応と続きます。

神様が主導権をもって、預言者となる者を呼び、立て、送り、話すべきことばを下さり、それに反応するというのが預言書の記され方の常です。

「誰々にあった主の言葉」とか、「何々についての主の宣告」というような主なる神様の語り掛けが先にあったことを告げる言葉から始まるのが預言書の共通点なのですが、ハバクク書だけは、預言者ハバクク自らの言葉から始まります。

しかも、その言葉が「主よ、私がここにいます。私を遣わしてください」とか、「主よ、あなたの御言葉を私が待ち望んでおります」というような肯定的な言葉から始まるのではなく、

否定的な言葉、反発反抗、抗議、神様に手向かう言葉から始まっています。

「神様、あなたは一体全体、何をしているんですか！」

「神様、何をボケーッと突っ立ってるんですか！」

「神様あなたは、何も感じないんですか！」というような痛烈な神様批判から始まるという衝撃的で異色な聖書が、ハバクク書です。

信仰が通用しない現実、納得のいかない応答、さらに荒々しくなる神様批判、「あなたそれでも本当に神様ですか！？ 全くもって私の考える神様像からかけ離れています！」と、神様の胸ぐらを掴むかのように責め立て問いただすところから始まります。

ところが一転、最後の 3 章に行きますと、「理解出来ず、納得できず、受け止

めきれない状況は何一つ変わらないどころか、むしろ悪化し、願ってもいないことが現実化していますが、それでも神様あなたは正しいですし、あなたゆえに私には歌える歌がありますし、喜べる理由があります」とダイナミックな展開を見せます。

ハバクク書はたった3章、節にしますと56節しかない短い書物ですが、そこには、時間の経過、感情の浮き沈み、反発と理解、歴史の胎動などの壮大なストーリーがあることが見えてきます。

また、私たちが良く知っている有名な御言葉、「義人は信仰によって生きる」というローマ書やガラテヤ書に引用されている言葉が元々記されているのもこのハバクク書で、「義人は信仰によって生きる」という御言葉は、使徒パウロや宗教改革者のマルチン・ルターの信仰に大変革を起こしただけでなく、ルターを起点とする私たちプロテスタント教会にも多大な影響を与えている御言葉です。

そんな長さは短いのに内容豊かな預言書が、ハバクク書です。

そして今朝、この献堂記念礼拝のこの時、このハバクク書の神様の御言葉から恵みを味わっていきたいと思っております。

Part One

先ほども言いましたように、今ハバククには、胸が張り裂けんばかりの大きな悩みがあり、それを神様に訴えます。

その悩みとは、「神様あなたは、私たちが生きているこの現実世界の問題に関心なんですか？」ということと、「私が神様に祈り、呼びかけ、叫び、訴えているのに、何で答えてくださらないんですか？」という2点です。

このことのために、胸が引き裂かれるほどに悩んでいます。

1：2－4節をもう一度読んでみます。

ハバクク書1：2－4（パワポ）

今ハバククは、自分が生きている周辺で、地域で、社会で、国家で、悪が蔓延っているばかりか、悪人が栄え権力を持ち、権力を持っている者たちが悪人となり、善良で弱い立場にある人たちがやりきれないような目に合っている、正義も公義もなされていない有り様が到底納得も理解も出来ないと、神様に訴えています。

「これが、神の民と言われるイスラエル人たちによって営まれている社会の、国の姿です！」、4節を見ますと、「神の言葉が、律法が、みおしえが機能不全を起こし麻痺しているような、全くもって神の言葉が効力を発揮できていないよ

うな状況にまでなっています！」と激しく訴えながら、「この痛切な祈りに、あなたが平和と義であられる神ならば答えてください！」と神様に嘆願します。

今ここで、ハバククの内心中で何が起きているのかと言いますと、不一致です。

私が信じている神、私が告白している神、私が確かに確信している信仰または神学が、現実と合わないんです。

私がそれまで学んできた、信じてきた、期待していた神様と、日々の人生の現場で出会う神様と合致しないんです。

この不一致が、今、ハバククにとって大きな悩みとなっています。

善良に思える人ではなく、不義なる者たち、悪しき者たち、ずる賢い人たちが歴史の主導権を握り、成功し、上手く行っているように見える世界。

この悩みはハバククだけの悩みではなく、全人類史に通ずる世間一般共通の悩みですよね。

詩篇73篇にも、「悪しき者たちは死ぬまで安らかで、まことの神を信じ、神の御言葉に従って生きようと努めている人は、打たれっぱなしで、新しい朝を迎えてもその苦難が取り除かれることはありません」と、張り裂けんばかりの思いを神様に吐露する内容が記録されています。

そして、その詩篇の著者は、納得のいかない思いそのままに、神を礼拝するために神殿に入ったら、「悪しき者と思っていた成功者を羨ましがっていた自分自身こそ、貪欲な獣のようでした」と、告白をする心境へと導かれ、納得をしていきます。

ハバククが生きたらう時代背景から想像しますと、腐敗した社会を立て直すために御言葉に立ち返り、神の言葉に従って生きることを国家政策の第一にし、その改革運動を先頭に立って推進し、国家をまとめ上げていたヨシヤ王のような信仰に厚い王は、戦争であっけなく死んでしまい、再び悪しき者たちが勢いそのままに権力を握るという悪しき現実問題を経験したようです。

そして、訴えます。

「神様、あなたはこんな方ではないはずですよね！ 神様、あなたはこの状態を見て何とも思わないんですか！ この状況分かっておられますか？ 分かっておられないようなので、私がお教えしましょう！

神様が主導権をもって歴史を動かしておられるとは到底思えませんし、神様のご性質とは全く違う方法で世の中回っているじゃないですか！ 神様の御言葉は無視され、全くもって世の中に影響を与えることも出来ていませんよ！ 私が傷つき、私の心が痛むのはもとより、神様、あなたが世の人々から侮辱され

ていますよ！ 神様の御言葉どころか、神様が実在しないかのように思われていますが、それでも大丈夫なんですか！ 私が訴えていることは、私の収入が増えますようにとか、私が栄えますようにということではなく、（新約聖書的に言うならば）神の国と神の義が倒れ、崩れ、崩壊していることを訴えているんです！ 何か処置を施してください！」と叫び求めます。

すると、「ならばその祈りに応えよう」と、神様が5節以降で応答してくださいますが、その応答の内容がハバククの想像を絶するものでした

Part Two

神様は、「OK! じゃ、わたしはあなたが想像も出来ず、夢にも思わないような方法をもって、わたしがあなたの祈りに応えよう」と、「あなたの言う正義、公義、悪の問題を解決しよう」と仰います。

で、その方法というのが、カルデア人を起こし、イスラエルを侵略させ、支配させ、滅ぼすという方法です。

カルデア人とは、ダニエル書に出てくるバビロンのことです。

カルデア人がどれだけ残忍で、無慈悲で、高慢で、しかも能力に長けているのかを5節以降に詳細に記しています。

ハバクク書1：5－10（パワポ）

この神様の応答を聞いたハバククは、それまでは、ただ声だけで叫び訴えていましたが、12節からの神の言葉に対する彼の応答の言葉を見ますと、あたかも神様の胸ぐらを掴みながら怒りを爆発させ、問いただすかのように迫っていくのを感じます。

「もし、この事が本当に起こるならば、私が知り、私が学び、私が期待していた神様の姿とはかけ離れていますし、乖離しています！

何がどうなって、一体全体、神様あなたご自身が選びだしたあなたの民たちが虫けらのように扱われ、引き網にかかった魚がすべて焼き魚にされて食べ尽くされるかのような状態にしておいていいんですか！

もし、それでいいならば、神様、私はもうこれ以上、あなたのことを神様とは呼べません！」と、徹底して神様に歯向かいます。

ここでハバククが掲げる論理は、こういうものです。

「神が義なる神であるならば、何ゆえに、何がどうあって、悪に対してさらに悪い悪をもって返すのか？

悪を解決して欲しいと訴えたならば、善良な人たちや弱い人たちが主導権を握って、悪者を追い出す方法こそ当然取るべき方法ではないのか？」というもの

です。

今ここで起こっていることを他のものに例えるならば、町に蔓延るこそ泥集団がいて、その盗んだものが積もり積もって膨大な財産となり、しかも全くバレることもなければ捕まることもなく、あれよあれよ言う間に富む者となり、豪邸を建て、ビルを買い、高級車を買い、権力まで持つようになった一方で、その被害にあった毎月の家賃やローンを支払うために汗水流しながら誠実に生きていた人たちは、家を追われ、家族一同路頭に迷うような不義が、公然とまかり通っているのです。「どうにかしてください」と祈ったら、神様が、「よっしゃ、わかった！ そのこそ泥たちを排除するために、世界最大の反社会的勢力をあなた方の町に送り、彼らに町を牛耳らせよう！ ゆくゆくは、彼らのボスに市長になってもらい、若頭に副市長になってもらい、地域のリーダーにその組員を配置しよう」と言っているようなものです。

だから、ハバククは神さまに、「冗談じゃありませんよ！ ふざけないでください！」と訴えるんです。 ある意味当然の訴えですね。

Part Three

先程、詩篇73篇の詠い手が、「悪しき者ばかりが悪しき者ではなく、この私こそ悪しき者であり、貪欲な獣のようです」と告白して、神様の業の知恵深さに合点がいったことをお話ししましたが、まだこの時点でハバククは、合点がいていません。

神の言葉が無視され、神の言葉が機能不全に陥り、暴虐がまかり通っている母国イスラエルの自分たちイスラエル人の不義を神様に訴えているはずなのに、カルデア人が出て来た途端、

「いやいや、神様、私たちイスラエル人を誰と比較してくれちゃってるんですか？ あの野蛮で、卑劣で、暴虐そのもののような者たちに較べたら、私たちは善人ですよ。 それぐらい、分かりますよね？ あの根っからの悪人、真の悪党どもと私たちイスラエル人を一緒にしないでください！ イスラエルの悪党は、カルデアの悪党たちよりも善良です！」と、神様をたしなめます。

ハバクク書1：13（パワポ）

ここで言う“悪しき者”や“裏切り者”とはカルデア人のことで、“正しい者”とはイスラエル人のことです。

さっきまでは、自分たちイスラエル民族の暴虐と言うほどの不義について神様に訴えていたのに、「いやいや、カルデア人に比べたら私たちイスラエル人は善良ですよ！」と開き直ります。

どうですか、皆さん、このハバククの開き直る姿を見て。

「なんて不信仰な奴なんだ！　ただでさえ、神様を侮辱し、反抗し、聞き分けのない不敬虔な奴なのに、ここにきて、何だこのふてぶてしさは！」と思いますか？

実際ハバクク書が説教される時、「私たちクリスチャンは、ハバククのように不信仰ではあってはいけません。　ハバククを反面教師にして、神様の御言葉に従順に従っていきましょう。　どんな困難があろうとも、やがて行く天の御国、またやがて来る新しい天と新しい地に入ることを考えれば、大したことありません。　永遠の命だって与えられているんですから。　ハバククのように神様に反抗的な態度を取るのではなく、神様の御言葉に誠実に従っていきましょう！」というように、語られることが少なからずあります。

でも、この説教合ってるのでしょうか？

すみません。説教に合うも合わないもないですし、このような説教だって一理も二理もありますし、立派なメッセージだと思います。

しかし、ここで一つ確かに言えることは、「ハバククを反面教師にしましょう」ということは、正しくないということです。

ハバククは、本当に不信仰な者でしょうか？

ハバククの訴えは、本当に不敬虔な訴えでしょうか？

逆にハバククの姿にこそ、私たち信仰者は倣わなければならないと思うんです。

もし神様の応答に納得がいかず、自分の置かれた処遇や直面している問題が神様を信じ慕い求めているにもかかわらず、到底受け入れられないし、「神の存在なんかもうこれ以上知らん」となれば、ヨブ記のヨブの奥さんのように、「もういいわよ！　世界のすべての人々を愛していたとしても、私一人だけは愛しておられないんですね！」と吐き捨てて、家出してしまえばそれまでですが、ハバククは、最後まで、どこまでも、その納得のいかない思いを神様にぶつけ、神様に突っかかっていき、神様の内で解決を得ようと、神様と格闘します。

与えられた神の言葉と格闘するんです。

「神の言葉との格闘にこそ、答えがあるんだ」と、「あるはずだ」と、神様に噛みついたその口を放そうとしません。

「何としてでも、天地万物をお造りになり、すべての物事を統べ治め、イエス・キリストというあり得ない犠牲まで払われた愛なる神から答えを得るんだ！」と、掴んだ神様の胸ぐらを放そうとはしません。

ヨブは、奥さんに捨てられただけでなく、家族一同みな突然亡くなり、所有していた莫大な財産が一夜にして吹き飛び、自身は体中わけのわからない不治の病にかかっても、なお、神について言及します。

ただ、その神についての言及は、ほぼすべて神様を呪う言葉です。

ですが、その真意は、「神様の内にあってなんとしてでも、答えを見出したい」という信仰の裏返しですね。

神様の元から家出なんかしません。

家出しているように見えて、しっかりその神の家の中で、悶えています。

だからヨブ記の最後を見ますと、不信仰に不信仰を重ねているように見えるヨブのことを神様は「3人の友人たちよりも、はるかに正しかった」と仰います。

信仰的な立派な言葉を並べ立てている3人の友人たちよりも、神を恨み倒したように見えるヨブこそ、「神のうちにある人だ」と仰います。

Part Four

ハバククも同じです。

「私の考える、私が期待する、私が望む神、または私が学んできた神学と信仰が、毎日生きる人生の現場に通用しない、適用できない、合っていない」ということのために、神様と格闘するのです。

その格闘は不信仰ではなく、不敬虔でもなく、最後まで、行き着くところまで、何としてでも神様にすがり、神様に噛みついて放さない、神の内にあって解決しようという信仰の表れです。

私たち信仰者は格闘家です。 霊的格闘家です。 格闘する相手は、神様です。

私たちは毎日、日々、今日出会う神様が神様でないかのように、神様じゃないかのように感じながら生きています。

じっと押し黙って何にもしてくれないかのような神様に、やきもきしながら生きています。

何か事が展開したかと思うと、たまには望んでいるように展開することもあります。ほとんど望んでいないように展開し、現状維持ならまだしも現状がどんどん悪化していき、望んでいないことが現実になっていくこともあります。

私が信じる聖書の御言葉が虚構、フィクション、戯れ言、作り話のように感じる悩みと葛藤の中、生きています。

それなのに何ともないかのように、「それでも神様は生きておられるし、僕はそんな神様を信じているから大丈夫！」ということだけが信仰で、

「ああ、もうこれ以上クリスチャンなんかやってられない、神様はいないようだ・・・」と告白するのが不信仰で、不敬虔なのか？

違いますね。

「信仰とは、神様の御心を知り、その御心に従って忠誠を尽くしながら歩んで

いくことだ」と私自身言ってしまうがちですが、これは大きな誤解です。

神様の御心をはっきり知って進んで歩んで行くななんてことは、ほぼありません。

神の御心は確かに聖書の内に記されており、その聖書は確かですが、私達個々人の日々の生活にあつての事細かな具体的な神様の御心を事前に知って、行動を起こすことなんかほとんどありません。

だから、一日の始めに聖書を読み、祈ります。

私はよくこんな祈りをします。「神様、今日一日どう生きていいのか分かりません。今日私が主の内にあつてすべきことを教えてください。そしてあなたもよくご存じのように怠け者ですから、今日あなたの望む私がやるべきことをなさしてください」と祈ります。

よく分からない暗いトンネルを一人寂しくトボトボと歩くように歩き進めてみて、ある時ふと後ろを振り返ってみると道が出来ていた。

「神の御心を求め、神の御心が何なのかを探りながらだ」とは言うものの、「実際は自分の心の赴くままに生きているのではないだろうか」という思いも混在しながら生きてみて、振り返った時、「ああ、あの時、道が塞がれたのは、この事のためだったんだ、道が閉ざされ思い通りに事が運ばなかったのは、神様の御旨だったんだ」と、後になって知ります。

Part Five

使徒の働き 16 章に、使徒パウロが神様の御心がどこにあるのかをパウロなりに真剣に探りながら、東の国目指して出発し進んでみたら、主の霊が「それを違う」と妨げました。

悩みながら、手探りしながら、「これこそ主の導きだ」と言って進んだはずなのに違った。

神様の御心を探り、神様の御旨に従いながら生きたいと願い、悩み、牧師に相談し、聖書を読み、本も読み、つたなくても祈りを献げ、自分の経験、知性、常識、理論、論理自分なりにすべてを動員して、これが主の御心だと確信して進んでみたら、主の霊がそれを妨げた。

じゃあ、そこまでの道のりは意味がなかったのか？

試行錯誤しながら、こっち行き、あっち行きしたのは無駄だったのか？

違いますね。

それこそ、信仰生活ですよ。

なぜ神様は、こんな試行錯誤を許されるのか？

神様は意地悪で、私たちが苦しみもがいているのを、高みの見物をしたいから

そうされるのか？

神様は、神様の御心を明確に見極め、神様のために全力を尽くして、効果的に成功を収める忠誠心と奉仕に関心があり、そんな忠誠心と奉仕が足りないから、妨げるのか？

これもまた違いますよね。

聖書の神様は、私たちの忠誠心とか助けがないと神様やってられないような方ではありません。

私たちが何かをしてさし上げなければ、神様なんかやってられないようなお方ではありません。

神様のただ一つの関心事は、私たち自身、私達一人一人、その者です。

試行錯誤を通して、神様との関係が深められていくことに、その意図が有ります。

聖書が教えてくれる神様の関心事は、私たち一人一人との関係を深めていくことです。

神様からこと細かい人生の設計図も、道標も与えられていないにもかかわらず、それでも神様の御心を探ろうと、神様の御手を見出そうと迷い、倒れるけれども、また起き上がって始めようとするその姿自体に神との関係の深まりがあり、神様が尊ばれる私たちの信仰生活です。

ハバククは今、その道を進んでいるのです。

「現実が理解出来なくても、私の信仰が私を裏切ったとしても、私は最後まで、神様にしがみついて放さない」という信仰を生きています。

ハバククの信仰姿勢から教えられることは、信仰とは、ギャップの中に、隔たりの中に、飛び込んでいくことだということです。

では、何のギャップか？

私の確信している信仰と現実とのギャップです。

「神様理解出来ません。神様なんですか？ 神様なんかいないと思います」と質問を投げ続けることです。

これを今、ハバククはしています。

信仰と現実を別個にするのではなく、信仰と現実のギャップの中に飛び込んで、どんな形でもいいので質問を投げかけながら、そしてそこから、一步一步導きを受けていくことを信仰を生きるとか、神学をすと言います。

神学書を読んで、本を読んで、勉強して、確信していくことが信仰や神学ではなく、その学んだことや信じていることが、現実の人生の現場でなぜ通用しない

のか、なぜ適用できないのか、なぜ思ったように事が運ばないのかというギャップに入って行って、その中で神様に質問を投げ続けてながら生きていくことを信仰を生きるとか、神学をしますと言います。

ハバククは、「神様は祈りに応えてくださる」という信仰と神学はありましたが、それが現実に応用できないというギャップの中で、神様にしがみついていた。

そして、そこで知りました。

何をでしょうか？ 神様は確かに祈りに応えてくださる方であることには間違いないけれども、神の時に、神の方法で答えてくださるということをです。

自分の信仰が、自分の神学が狭かったということを知ります。

そしたら、心に余裕が生まれました。

神様は、必ずやご自分の時に、ご自分の方法で、祈りに応えて下さり、正義と公義を実現されるということに確信を与えられています。

悩んで、悩んで、神様に質問を投げかけるというのは、修行をして、断食をして、祈祷院に籠ることではなく、人生の現場で生きながら、神の言葉である聖書を読み、調べ、聞き、問いただし、解釈し、悩み、時にはケンカを売り、そして祈りながら、一つ一つ神の導きを受けていくことです。

ハバクク書を読み進めて行きますと、世の中の示す秩序の身に従って生きていくために、またそんな世の中で踏みつぶされないために、目の前に迫っている選択をする際、世に適応し、世に迎合し、神の言葉を無視し、神の言葉を人生において麻痺させ、神の定める秩序の中で生きていくことを避けていくと、結局、願ってもいなかったバビロンやカルデア人に象徴されるような殺伐とした世の支配を受けるところへと投げ出されるんだということを警告として教えられます。

イエス様は、ルカの福音書9：26で、「わたしとわたしのことばを恥じるならば、かの日には、その人のことを恥じる」と仰いましたが、その通りのことがハバクク書に描かれているイスラエルの民たちに起こっています。

Conclusion

何が悪で、何が善で、何が災難で、何が戦争で、何がパンデミックなのか、正直よく分からないような秩序がありそうで秩序のない混沌とした時代が、エデンの園を追われた時から今の今まで続いています、それでも義人は信仰によって生きるんです。

ここで言う義人とは清く正しい人の事ではなく、自分の信仰によって期待し

ていたところとは大分違う暗闇のようなところを、それでもなお、神様の胸ぐらを掴むかのように、一度噛みついた口を放さないかのように、または、何にも出来ないような無力であったとしても、神様のことを諦めずに、淡々と一步一步踏みしめていく人のことです。

形なんかにとらわれず、自由に神様と格闘する人のことを義人と言います。

献堂35周年を恵みのうちに迎えているこのキリストの群れの一人一人が、そんな義人として歩ませられていることを感謝したいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ人への手紙1：17